

第3回シンポジウム（抄）

開催日：平成21年7月16日（木）14:00～16:45

場 所：弘済会館 4階「萩の間」

～スポーツの多面性と地域活性化効果～

I. 基調講演 清水 慎一（(株) ジェイティービー 常務取締役）
「スポーツの多様性と地域活性化の効果について」

II. 展示 株式会社アシックス
大塚製薬株式会社
株式会社ジェイティービー
長永スポーツ工業株式会社
日本ボウリング商工会
株式会社よしもとクリエイティブ・エージェンシー

III. パネルディスカッション

コーディネーター

間野 義之（早稲田大学スポーツ科学学術院 教授）

パネリスト

石井 宏子（温泉ビューティ研究家）

清水 慎一（(株) ジェイティービー 常務取締役）

村山 哲二（プロ野球独立リーグ・BCリーグ 代表、
(株) ジャパン・ベースボール・マーケティング 代表取締役）

敬称略

司会 予定の時間となりましたので、ただいまから始めさせていただきます。

今日は、社団法人スポーツ健康産業団体連合会の開催いたします「第3回シンポジウム」にご参加いただき、誠にありがとうございます。

開催に先立ちまして、私ども連合会の会長であります斎藤敏一から、ご挨拶を申し上げます。

斎藤会長 皆さん、こんにちは。

今日、ご講演いただくJTBの清水常務とは、スポーツ健康産業団体連合会のみならず、サービ

ス産業生産性協議会でも一緒しておりまして、大変な論客で、サービス産業の生産性の向上にも助けていただいております。皆さんがイメージするスポーツあるいは健康産業だけではなく、いろいろな業種がスポーツを切り口に、いろいろな商品を開発したり、あるいはスポーツの振興、健康の向上に貢献する活動をしておられます。その一つとしてスポーツツーリズム、ヘルスツーリズムということもお話に出てくるのではないかと思います。大変期待しております。

そのあとのシンポジウム、清水常務にもパネラ

ーに入ってください。コーディネーターの間野先生は、いつも我々のパネルディスカッションでお世話になっております。温泉ビューティ研究家の石井さん、大変期待しております。村山さんは、前回の地域・スポーツ振興賞で最優秀賞、経産省の局長賞となった方で、前回も発表されましたが、今回はパネラーに加わっていただきます。

我々の活動としては、経産省から受託事業として、「ゲーム化するスポーツ、スポーツ化するゲーム」ということで、ゲーム業界は敵ではないということが研究結果で出ています。今年度も経産省にお願いして、その続編をやりたいと思っております。

私は、何とか2年間、会長の任期を終えまして、もう2年やれということで、この間の総会で、再度、会長に選ばれました。何とか財政的にも目途がついてきましたし、このシンポジウムも定着して、地域・スポーツ振興賞という新しい試みも徐々に出していきたいと思っておりますので、今後とも皆様のご協力をお願いいたします。

I. 基調講演

司会 本日の基調講演を行っていただきます、清水慎一様をご紹介させていただきます。

1948年のお生まれで、1972年に東京大学法学部を卒業、日本国有鉄道に入社。その後、JR東日本に移行され、取締役営業部長、取締役仙台支社長を歴任。2004年に株式会社ジェイティービー常務取締役役に就任。2005年、同社の事業創造本部長に就任され、宇宙旅行・シニアロングステイプラン等、新商品を打ち出されました。現在、全国産業観光推進協議会理事等で数多く活動され、また、地域活性化推進の牽引役として、各地で開催されるフォーラム、分科会の講師と、幅広く活躍中でございます。

本日は、スポーツの多様性と地域活性化の効果について、お話を賜ります。

清水様、よろしく願いいたします。

清水 ただいま、ご紹介いただきました、清水でございます。貴重なお時間を少しいただきながら、スポーツと地域活性化、これにツーリズムが入るのですけれども、この辺の話をさせていただきたいと思えます。

私はもともと国鉄、JRでございます。鉄道マニアで、自慢は、鉄道の模型を、たぶん1千両以上持っているのが自慢です。そのために、長野に

鉄道マニアの館を持っています。

地域との関わりは、JR東日本になりまして、営業担当の役員、あるいは東北の鉄道の責任者をやった時からです。その時に、東北の各地域が、あまりにもひどい状況にあるなということを感じました。人口減少、高齢化です。あるいは、ちょっとした負け犬根性も含めて。そういった地域と対峙しながら、いろいろ議論をして、どうやって地域が元気になったらいいかなという話を、ここ数年、続けています。昔から観光地としては有名な東北ですけれども、逆に言えば、それが、いわば成功体験になって、うまくいっていないようなことも含めて、いろいろ議論をさせていただいております。

昨日は、たまたま、奥会津の三島町というところで、若手が百数十人集まりましたので、何とか奥会津を元気にしたいという話をしてきました。だいたいハコモノは、もうできあがりしました。野球場、観光施設も整備された。道路もだいたい整備されてきた。しかし、ないのは、それを使うソフトと、それを使う人材と、それを使わなければいけないという熱気が足りないかなと。今、それをどうしたらいいのかなと考えております。まさに地域づくり、その辺の課題を、今、考えているわけです。

たまたま、内閣府の地域活性化のお手伝いをしてございます。地域をもっと元気にしなければいけないという中で、私はツーリズムを通して元気にしていこうということをかねがね言っているのですが、実は、ツーリズムを通して元気にすることと、スポーツを通して元気にすることと、似ているのではないかと、あるいは同根かなという思いを最近すごく強くしております。ツーリズムの意義とスポーツの意義が同じような中身を持っておる。そういった意味で、地域おこしにおいてツーリズムをいわばツールとすると同時に、スポーツをツールとする、あるいはスポーツをひとつの目標としていくといったところとも大いに関係してくるかなという感じを深くしました。

斎藤会長にお会いして、スポーツ健康産業団体にも是非入ってほしいと。今まではスポーツ関係者だけの団体だったけれども、是非、いろいろな人たちに加盟してもらいたいのだというお話をいただき、一も二もなく入らせていただいて、現在、こちらの理事もさせていただいております。

ご承知のとおり、農業と観光というのは、今、

完全に一体化なのです。農業なくして観光なし。農業の活性化というのは観光でしかあり得ない。これが、やっと農水省さんも気が付かれて、農業はグリーン、観光がツーリズム、グリーンツーリズムですね。ところが、農水省さんの担当者の最初の方が、それを「田植え体験」と訳したものですから、田植えだけを体験するのかなというふうになったので、おかしくなってしまったのですが、そうではないですね。農家の暮らしと、観光というのが一体なのだ。農家の暮らしこそ観光の、いわば主体だし、観光客は農家の暮らしを味わいたいのだ。それがグリーンツーリズムということなのです。同じように、スポーツツーリズム、スポーツとツーリズムというのは、私は、一体のものかなと。

ちなみに、私のスポーツ体験、まったくありません。メタボ予備軍で、「スポーツをしろ」と言われているのですが、私は鉄道マニアなものですから、夜中じゅう、電車を動かしているのが大好きなので、朝の散歩しかありません。ただ、JR東日本の最初の野球部長というのをやり、都市対抗に何とか出たいな。ずっと国鉄時代にできなかったから、JR東日本になって、すぐ野球部長になりました。私どもの社長だった松田が、今、野球連盟の会長をさせていただいております。それだけだと思います。非常にスポーツとの関係は、私自身は薄いのですが、ただ、関心は非常に高い。

最初に、観光交流を巡る動きをちょっとお話しします。今、観光といった時に、合い言葉として、「交流なくして活力なし!」。これは、人口減少で地域が衰退するけれども、お客様が来ることによって元気になるだろうということです。よく、大分県の由布院の方々が、人口わずか1万2千人の街だけれども、観光客が400万人来るのだと。1日当たり1万人だ。だから、本当は、1万2千人の街だけれども、2万人の活力があるのだ。まさに「交流なくして活力なし!」。人口減少が続く中で、お客様が来ることによって元気になると、これが観光立国、観光立県の認識です。

しかし、最近の観光は、また違うのです。「交流なくして活力なし!」で、お客様が来てほしい。昔だったら、JTBに「送客してくださいよ」、JRに「送客してくださいよ」、「分かった」といって、それで済んだのですが、今はまったく通じません。今のお客様は、JTBとかJRが商品を作ったって、簡単に乗ってくれませんね。ですから、私どもの売上げは減少一方。そういった意

味で、昔のマスツーリズムの時代は終わりです。今の観光は何かというと、「活力なくして交流なし!」。実は、住民が元気に活動しているところにお客様は吸い寄せられていく。「おっ、新潟で、村山さん、なんか楽しそうにやっているな」というところに、単にサポーターだけではなくて、いろいろな人が吸い寄せられていく。「清水さん、だって、交流があつて初めて活力があるから、だけど、活力がないと交流はないの。どっちが先よ」と。これは、だから、鶏が先か卵が先かではなくて、同時並行なのだ。まさに活力がないと交流は生まれません。活力というのは、実は、地域に対する誇り、それが出てくれば活力があるのです。今、やっとこれに気がついてきて、地方の時代、東国原さん、あるいは大阪の知事が発言している。やはり地方の時代になりました。

この時の交流というのは、地域内の交流と地域間の交流、両方を表します。地域間の交流が観光です。あとは地域内の交流、これが活力です。実は、今日の議論の焦点はここなのです。地域内の交流がないくせに、交流だけを考えているところがあるのです。これがあらゆる地域活性化の原点です。今、あらゆるものが曲がり角にきています。

例えば、観光をやる時に、私はもう旧来型の観光協会は要らないと言っているのです。なぜならば、観光協会のメンバーは、どこでも、行政と、JTBなどの旅行会社と、JRなどの輸送機関と、これに旅館・ホテルだけなのです。しかし、そんな観光は、もう成り立たない。農業なくして観光は成り立たない。あるいは、モノづくりなくして観光は成り立たない。既存の旧来型の観光協会が観光をやっているところは軒並みダメです。「観光、観光」といって騒いでいる割に、うまくいっていない事例はほとんどそういうことです。観光協会に高い会費を払って、やっていることは単に提灯をぶら下げること、旗、フラッグですね、そういうのが多いです。それを乗り越えないかぎり地域内の交流はあり得ない。あらゆる団体が、今、それを乗り越える必要があります。それが乗り越えられるかどうかによって活力が出てくる。スポーツによる街おこしもスポーツ関係者がそこを乗り越えられるかどうかです。この活力というのがポイントです。しかし、この活力は、逆に言えば交流、観光によって生まれてくるということもあります。両方のことを頭に入れてやっていただければいいと思います。

2003年に「観光立国」になりました。交流人口

の拡大による地域の活性化というのが出ています。観光は少子高齢化時代の経済活性化の切り札。これから人口減少になります。年間の消費額、購買力が1人当たり121万円、人口が1人減ると121万円の購買力が減る。これをお客様でカバーしよう。外国人の方は1人当たり18万円使います。あるいは、国内の方でも宿泊をしますと5万4千円使います。ですから、外国人の方が7人来れば定住人口1人減少分の購買力をカバーできる。これが観光交流による経済効果です。こういった形でお客様が来ることによってカバーできるということです。

特に、今、日中韓、このトライアングルの動きを、まだ1千数百万人ですが、早く2千万人くらいにしようということになっています。残念ながら、まだこれは双方向になっていません。これを双方向にやれば日中韓というのは非常におもしろい展開になるだろう。

実は、観光は平和へのパスポートだという言葉があるのです。ここを活発にすることによって、上の政治家同士は仲が悪くても、住民の交流が続けば誤解は進まない。

中国でアンケートをとりました。日本に来たことがある人、日本に行ったことがない人、両方のアンケートをとり、「日本が好きですか」。日本に来たことがない人は、日本が好きな人はわずか2割ですけれども、日本に来たことがある人は、日本が好きだというのが5割になります。なぜならば、メディアから一方的に伝わる情報と、現実に日本に来て日本人たちの親切、ホスピタリティに触れた時の差です。いくらインターネット時代でも人は動かなければいけない。今度は中国の個人ビザが解禁されましたけれども、特に、政治体制が異なる中国、ロシアとは人々の交流をもっとやらないといけない。観光交流の意味合いがあります。いろいろな目標がありますけれど、この辺は省略します。

多様な観光交流が実は地域を活性化する。昔の観光はいわば物見遊山の周遊型、観光施設の観光、非日常型、どんちゃん騒ぎです。一時期集中、名所旧跡、金を使う。観光地は地域と乖離。囲い込み、一点豪華。今の観光は生活体験の滞在型。非日常ではなくて異日常。オンとオフの境なし。テーマ性の強い旅。金ではなくて時間。地域の生活の共有、体験、交流、学習。リーズナブルなドゥ・イット・ユアセルフ。単に温泉と観光施設だけを巡ったって、今のお客様はなかなか満足しない。

逆に言うと、そういうツアーだったらできるだけ価格を安くしていきたい。しかし、こういった多様な観光がある場合には、単価は惜しまない。由布院のお客様は、平均単価で2万1千円。それに対して、これから石井さんからのお話があると思いますけれども、東北の旅館、平均して1万2千円。何で東北の温泉は1万2千円しか払ってこないのか、由布院は2万1千円も払うのか。それは、こういった多様な観光の受け皿になっているからです。多様な観光というのがこれからひとつのポイントになるということです。

これからの観光は、「まちじゅう観光」なのです。今までの観光は狭い概念、行政、旅行業界、交通機関、観光施設業界、この狭い概念だけでやっていたが、これからの観光は、市民、おじいちゃん、おばあちゃん、環境団体、歴史、伝統、文化、まちづくり、産業遺産、医療機関、警察なんかも関わるのです。なぜならば、これからのんびり歩きたい、のんびり歩いた時に歩道にベンチが欲しいよな、歩道でオープンカフェでもやってくれないかな、ウィーンに行けば当たり前なものな、ということをお我々が提案すると、警察が「ダメダメ、そんな第三者占有は認めない。変なやつがそんなことをやったら困るじゃないか」。JRもそうでした。駅前広場で音楽でもやろうものなら、「邪魔、邪魔、邪魔」。逆に言うと、これから、観光には警察の人が不可欠だと。是非、警察の理解が必要だというふうに思いますけれども。その中で、スポーツ団体、飲食店、モノづくり、こういった人たちが全て揃わなければツーリズムは成り立たない。ですから、これは「まちじゅう観光」だと。そういった時代になってきたわけです。今まで、観光というと、この一部のメンバーだけがメリットを享受していましたけれども、うまくすれば全員が観光の効果を享受できる。そういった期待も含めて、「まちじゅう観光」という言葉が、今、定着しつつあるわけです。

これが今の観光です。まさに地域全体で担う観光です。ですから、これからは、多様な観光をやるとすれば、いろいろな資源を繋がないといけない。前は、観光施設と旅館、これだけを繋げばいい。ですから、私どもJTBの契約施設も、圧倒的に観光施設と旅館です。ここから手数料をいただくけれども、もう、お客様は満足しません。それより、街なかを歩きたいよ。あるいは、農家のおばちゃんの話を知りたいよ。ですから、先ほどのグリーンツーリズムは、農業の体験だけでは

なくて、農家レストランで食事をしたり、おじいちゃんの昔話を聞いたり、農村の景観を楽しんだり、そこで健康とかそういったことを考えながら、旅館、ホテルに入る。これがグリーンツーリズムです。まさに、今までとはまったく違う。私どもは、これをニューツーリズムと言っています。昔のオールドツーリズム、マスツーリズムに対応したニューツーリズム。ですから、多様な観光を我々はニューツーリズムと称しているわけです。

このニューツーリズムというのは、今、あちこちでたくさん出ています。エコツーリズム、グリーンツーリズム、文化観光、産業観光、ヘルスツーリズム、ホワイトツーリズム、何々とツーリズム、何でもありです。地域の暮らし、あるいは地域の歴史、伝統、文化に根ざすものだったら、それをくっつけることによってツーリズムが生まれていく。逆に言うと、そういったものしか、これからの観光は成り立たないということです。

例えば、国土交通省で、今、こういったニューツーリズムを一所懸命に称揚しています。福島県の喜多方市は、蔵の街、ラーメンの街ですが、現在、ここに太極拳を入れている。これはなぜかという、蔵の街、ラーメンの街だけではお客様が満足しない。特に、一番関心があるのは健康。実は、旅とスポーツの共通のキーワードは健康、その健康が大きなポイントになるとすれば、たまたま、そこの白井という市長が「太極拳がいいんじゃないか」と。それによって太極拳の街になりました。この間、全国大会、1万人近い人が全国から集まりまして、道路じゅうで、みんな太極拳をやっています。

山形県の大蔵村は、肘折温泉とあって、湯治です。しかし、湯治だけではお客様は来ない。どうしようか。ここは、ノルディックウォーキングです。今、東北は、あちこちでノルディックウォーキング。仙台にすばらしい方がおられて、定着をしつつあります。秋保温泉もノルディックウォーキング。という形で、ノルディックウォーキングによる自然体験、これを湯治にくっつけることによって、湯治本来の癒し、健康保全、それを確保しよう。昔の湯治のように、一巡り七日間、二巡り十四日間、行けない。数日間で何らかの形で健康を確保しようということで、運動療法が入ったわけです。我々は「現代湯治」と言っている。こういうニューツーリズムの動きが、今、たくさんあります。

どういう旅が、今、一番求められるかという、

癒しの旅です。歴史ある街並みを訪ねる旅、大自然の魅力を味わう旅、アウトドア体験を楽しむ旅、スポーツ活動を楽しむ旅、スポーツ観戦ではありませんよ。博物館や美術館を訪問する旅というようにずっと続いて、この辺に、スポーツ観戦を楽しむ旅。皆様方、ニューツーリズム、今の観光は何でもありですけれども、何でもありでも、幾つかのキーワードがあります。これが、健康、あるいは、癒しです。これは共通のキーワードです。歴史ある街並みを訪ねる旅、大自然の魅力を味わう旅もありますけれども、スポーツという言葉は、こういったところで極めて重要な意味合いがある。スポーツと旅、観光というのは実は同根ではないかというふうに思いました。

エコツーリズム、グリーンツーリズムは定着しつつあります。しかし、スポーツツーリズムは、残念ながらまだ単なる観戦の旅です。これをどうやって乗り越えていくか。JTBもスポーツという、チケット販売しか考えない。うまくプロ球団の下に入ってチケット販売独占契約をして、それで手数料を儲けよう。あるいは、もうちょっとやれば、選手団の輸送を受注しよう。しかし、違うのです。観光そのもの、旅そのものに、実はスポーツがあるのだと。今までの切り口を変えなければいけない。

ちなみに、ヘルスツーリズム、これは、今、非常に人気があり、どんどん伸びていきます。

私どもの目指す旅行は、健康にいい旅行、健康を考慮した旅行、これに、旅行前、旅行中、旅行後、そういったきちっとしたフォローをしながら健康の不安を解消していく。ここにエビデンスをどうやって付けていくか、これが実はヘルスツーリズムの、ひとつポイント。ただ、あまりにもこれをやり出すと、ちょっと違う方向に行くので、この辺のバランスです。

私どもは、ヘルスツーリズム、どのくらいこれから市場があるだろうという計算をしてみました。全国のあらゆる団体にアンケートを送り、徹底的に調査しました。結果として、4兆1,300億円くらいの観光市場に広がっていきだろ。宿泊が3兆300億円で、日帰りが1兆1,000億円。現在は、これの100分の1とか、ごく小さいです。

どういう取り組みを考えていますか。数千の団体にアンケートをした時のキーワード、一番が圧倒的に運動です。ウォーキング、ハイキング、トレッキング、運動、体操、トレーニング、ヨガ、太極拳、水中運動、水中トレーニング、マリンス

ポーツ、リハビリ。それから、食、健康診断、転地療法、森林浴、美容、教育、アニマルセラピー。その次が温泉です。

今、観光関係団体のかなりの部分、地域活性化に携わっているかなりの人たちが、これからの地域活性化のポイントは交流だ、その交流を生かすにはニューツーリズムだ、ニューツーリズムの一番大きな柱はヘルスツーリズムだ、ヘルスツーリズムのキーワードは運動だ、というふうに思っておられるのですが、実は、何が一番問題かというところ、これが動かないのです。縦割りの組織の中で動かない。これを担うリーダー、村山さんみたいな方が全国に100人いれば動くのですけれども、なかなか動きません。逆に言うと、可能性で終わっています。

JTBとしても、いろいろなツアーをやってみたのです。「休暇取得効果測定ツアー」とか、要するに、休みを取って旅に行くと、どういう効果があるだろうか。先ほど言いましたように、「エビデンス、エビデンス」と言われたものですから、「よし、エビデンスをとってやろう」と。

例えば、心理指標調査結果。ストレス指標が、旅行前と旅行中と旅行後でどういうふうに変わるのか。その時の活気とか、怒りとか、疲労感とか、緊張とか、抑鬱とか、こういった切り口で、旅行前、旅行中、旅行後でどういうふうに変わるか。こんなデータがたくさん貯まったのですが、全然ビジネスにはならなかったです、まだまだ。しかし、私どもは、3兆円近い市場が目の前にあると思って、今、やっているわけでありませぬ。

和歌山県の熊野では「熊野セラピー」です。熊野古道ウォーキングの健康効果の測定。ストレス、落ちます。免疫力、アップします。精神を安定させ活動性がアップします。

そういった意味で、ヘルスツーリズムというのが、これからポイントになるかな。「男磨き・女磨き」なんていう商品も作ってみました。メタボ改善ツアーですね。ニューツーリズムというのは、もうあちこちで動いています。ただし、なかなかまだビジネスまでは行っていません。しかし、私は、気がついた時にはビジネスになるのではないかと。スポーツ関係団体の皆様方が、どういった形で一緒になってコラボできるかどうか。この辺が、実はポイントかなというふうに、ずっと思っているわけでありませぬ。

ちなみに、NPOの日本ヘルスツーリズム振興機構を筑波大学の森先生にお願いしながら、こん

なものも作ってみました。

さて、ニューツーリズムの中でスポーツツーリズムの可能性について、私は、スポーツの多様性がツーリズムを通して地域を活性化させる。これがポイント。スポーツの多様性がツーリズムを通して地域を活性化していく。これがスポーツツーリズムです。

スポーツの多様性とツーリズムの多様性を足し合わせると、地域の活性化あるいは地域の広がり、一体感、これができあがります。いわゆる地域内の交流、地域間の交流、そういったものができあがってくるのではないかと思います。

この時のひとつの切り口が、村山さんがまさにそれ。私は、スポーツやスポーツ団体を核とした地域活性化、これをひとつの切り口にしていくのが早いかなど。今あるスポーツ、スポーツ団体を核とした地域活性化。合い言葉は、地域内の交流は「観戦から参戦へ!」、地域間の交流は「観戦から観光へ!」、これが私どもの合い言葉です。地域間の交流は「観戦から観光へ!」をやることによって、スポーツの参加率が向上し、スポーツを通じた活性化、地域内の活性化が生まれ、そこにツーリズムをくっつけることによって地域全体の活性化がさらに加速されていく、というのが私のシナリオです。

これによって地域内のスポーツの参加率が向上し、地域内の活力ができあがる。そこにツーリズム、お客様が参加をすることによって地域内の活性化が、いよいよ確立される。それがスポーツツーリズムかなというふうに思うわけですね。

ちなみに、スポーツ観戦は、もう、どこでもあります。私どもの調査でも、スポーツ観戦を目的とした旅行、44%の人が「行ったことがあるよ」。野球、サッカー、ウィンタースポーツ、というようなことです。「今後とも、してみたいよ」、56%の人がいます。これはある程度ベースが広がってきたのですが、問題は、これをどうやって次の段階に持っていくかということです。

石原知事が東京マラソンの話をしました。私は、一も二もなく賛成でした。この時に、私どもが申し上げたのは、まさに東京を味わうのだ。東京の各地域を味わうのだ。そこがキーですよ。もっと言えば、都民が3万人のマラソンランナーにはなれないけれど、東京マラソンに参画できるようにしていただきたいと。これによってニューヨークマラソンに匹敵するだけの規模になりましたし、外人の参加者が増えました。結果的に

日本の理解が広がっていくというような形で、この東京マラソン、素晴らしいことだと私は思っております。

私どもの徳島支店が、昨年から徳島マラソンというのを提案いたしました。吉野川を行って帰ってくるだけですけれども、まさに徳島の良さを味わいながら、往復、マラソンをする。これがたくさんの方々にご参加をいただく。マラソンというのは、地域の活性化のひとつの大きなきっかけになりますけれども、ただ、下手をすると、マラソンをやる人、見る人だけになってしまう。そこを、活力とツーリズムを通じた交流、これをどうやって作り上げていくか、そこがポイントだろうというふうに思います。

実は、山形の方々が、この間、国の「地方の元気再生事業」で認定を受けました。これは、山形のモンテディオ山形、非常に地域と密接な関係を持ちながらJ1に上がったチームですけれども、ここを単なるサッカーの選手とサポーターの関係だけにとどまらせたくない。それでは広がりがないだろう。一部のメンバーだけになってしまう。まさに、地域のいろいろな人たちにどうやって関わらせるか。そこに、外から山形にたくさん来る観光客をどうやって噛ませていくか。

ちなみに、山形に来る観光客、温泉、上山温泉、天童温泉。あるいは、サクランボ狩り、これで相当数来ていますけれども、残念ながら、ちょっとマンネリ気味で、山形のお客様というのは、毎年毎年、減少する一方なのです。

しかし、モンテディオ山形を中心にした元気な活動がある。それを地域活性化につなげられないか。地域におけるサポーターだけではなくて、あらゆる人の参画。例えば、このモンテディオ山形の活動に農家のおばちゃんに参加してくれないかな。農家のおばちゃんに参加してくれて、何かうまい形でやってくれないかな。これに、天童温泉に来て、「もう飽きたよ。この辺の温泉、もういいよ」と思ってきている観光客を、どうやって噛ませながら、モンテディオ山形を盛り上げながら、同時に地域を活性化するか。というようなことを、東北芸術工科大学とか、山形大学とか、ボランティアの人たちとか、いろいろな人たちが集まってみんなで議論しました。

その結果、観戦から観光へ繋ぐ地域のイメージアップ、県産品の販売戦略、観戦客の満足度向上作戦、県民120万人参加型プロジェクト、この4つのプロジェクトチームでいろいろ具体策を詰

めていったわけです。

まさに、スポーツ団体を核として、そこに、単なるスポーツ団体関係者、選手、サポーター、あるいは、それに関する狭い関係者だけではなくて、地域のあらゆる人たちを参画させ、同時に、ツーリズムを通して観光客を参画させる。これによって地域活性化を図っていこう。まさに、一石三鳥、四鳥くらいの効果を狙っているわけ。私は、スポーツツーリズムといったものを、これからやっていく必要があるのかなと思うわけであります。

今、地産地消、地元でとれたものは地元で消費しましょう。もうひとつの地産地商、地元でとれたものを地元で商売しましょう。というような形で、いろいろなグッズは、当然、あちこちでやっています。スポーツツーリズムの可能性をこんなところから見直していったらどうだろうかということなのです。

つい最近、bjリーグに、私どもJT Bも出資をした。今までは、こういった出資というのは、チケットの独占販売権、そういうのを見返りにしていたのですが、最終的に、先ほどの地域活性化とどうやってつなげていくかということを考えながら出資もさせていただいたわけであります。

さて、JT Bの仕事のひとつの事例で、地域活性化とスポーツとの関わりで、これがもうひとつの底辺の広がりときっかけづくりになるだろうと思っていますのは、学校行事、企業行事です。私どもは、全国の学校の修学旅行、あるいは企業の運動会はかなり扱わせていただいています。しかし、最近、限界を感じております。それは、なぜか。ひとつは、企業自体が運動会をやめてきた。もうひとつは、学校が従前のやり方について疑問を持ってきたということもあるけれども、そうではなくて、企業という枠の中でやっている企業行事、学校という枠の中でやっている学校行事が、実は限界にきているのだと。スポーツは、ともすれば企業スポーツ、学校スポーツと言われていきます。都市対抗のファンとしてJR東日本野球部を作ろう。JR東日本が行くと東京ドームさんは大喜びです。2万人、入りますから。JRは1試合で2万人くらい平気で動員できる。そのくらい都市対抗というのは、企業アイデンティティというか、企業の一体感にはすごいけれども、私は、果たして、そうかなと。今、そろそろ疑問に変わっているのです。JR東日本が、高速道路1,000円で対前年売上減がずっと続いています。今、経費節減といった時に、またバカな人が出てきて、野

球部はやめようと言い出しますよ。企業の枠内、学校の枠内でとどまっているかぎりダメなのではないかなというふうに思っているわけです。

実は、私どもは、「学校行事効果測定システム」というのを東京学芸大学の先生と作りました。SEASという名前で作りました。要するに、生徒とか先生方へのアンケートをとりながら、例えば、文化祭、体育祭、修学旅行、こういったものを分析・評価しながら、新たなものを提案していくという中身なのです。

いろいろなデータがあり、関心とか意欲、問題解決、実行スキル、コミュニケーション、抑鬱、知識・理解、体力・気力、いろいろな項目の中で、修学旅行と文化祭と体育祭の、こういった切り口における、ひとつの精神的な上昇意欲、成長感、この辺を測定してみたのです。そうすると、一般的に、修学旅行は極めて高い数字なのですが、体育祭は、いつも最低の成績なのです。それで、私どもは、学校の体育祭って限界がありますよ。今のやり方ではダメですよ。問題がありますよ、という話をしています。修学旅行も、やはり、ちょっと限界がありますね、という提案をするために、実は、こういったシステムを作ってみた。ただ、これはスポーツ関係のことを頭に入れてではなくて、単に学校行事全体についていろいろ考えたのですが、体育祭があらゆる数値が低いのです。

活力と交流、これが2つの切り口、活力の観点、交流の観点から言って、修学旅行はかなり高い数字になっているけれども、体育祭は、活力、交流の観点からあまり効果が上がっていない。これは、やはり、やり方を変えなければいけない。というように思いを深くして、このデータを見ながら、「うーん、やっぱり何かスポーツ関係の進め方って、どこか問題があるな」と。最近のは知らないけれど、いつまでも徒競走かよ。棒倒しは危ないからやめるぞという時代かな、といったところを感じたわけでありませう。

もし、これが先ほどの活力という形で将来の精神的な上昇意欲につながっていけば、スポーツの参加率が上がっていく、あるいは、交流という形でやっていけば、また違う形でこれが底辺を広げていく。体育祭のあり方について、今、ちょっと問題があるぞということを感じたわけでありませう。

学校行事、企業行事の再評価をするけれども、効果を最大にするには、地域との交流、スポーツツーリズムの発想が、私は、やはり必要ではない

かと。単に学校の枠の中でやっているだけではダメなのではないか。学校主体、企業主体ではなくて、「地域とのかかわり」をどうやって作っていくか。これが必要ではないかな。スポーツを通して組織内、地域内の活力を作り上げていく。それを、地域あるいはツーリズムという切り口を通すことによって、もっと確立することができるのではないかとということです。

以上、最後に申し上げますけれども、スポーツによる地域活性化、いろいろな議論があります。「総合型地域スポーツクラブ構想」の話があります。こういったものを進めていこうではないか。これによって、生涯スポーツ社会を実現しよう、豊かな地域コミュニティを再生しよう、そういった動きがあります。しかし、これも行政主導、企業主導あるいは学校主導ではなくて、地域主導にしようじゃないか。これは、たまたま福島大学の黒須先生の話聞いて作ったわけですが、まさに、こういった議論も、実は、先ほどのスポーツツーリズムみたいなものを通すことによって、私は、もっと具体化するのではないかと。

私の知人が相馬の市長をやっています、相馬市のお手伝いをしています。だいたいどこでもマスタープランがあります。最近、観光という言葉が、ほぼ100%入ってきました。観光による活性化、これはほぼ100%入ってきました。もうひとつは、スポーツという言葉も非常に増えてきました。

しかし、これが標準です。相馬市のマスタープラン、スポーツ・レクリエーション活動の充実。

市民が気軽にスポーツ活動に参加でき、生涯にわたり、健康で豊かな生活を送れるスポーツ環境づくりを目指して、生涯スポーツ・レクリエーション振興体制の確立を図ります。また、スポーツを通してまちづくりの活性化を図るため、市民総参加による各種大会の開催機会の充実、競技スポーツの振興、指導者の育成、各種スポーツ施設の利活用に努めます。

これは結構書いているほうです。キーワードは多いです。2行か3行で終わっているのがたくさんあります。スポーツ施設を拡充します。指導者を養成します、とって何もやらない市町村がたくさんあるのですから。

ここは、市民1人当たりのスポーツ施設の年間利用回数を、現状は6.1回だけれども、平成28年に6.6回に上げていきたい。こういった具体的な数値目標も挙げています。

ちなみに、この相馬の市長さんが、今回の補正予算で交付金が増えてきた。交付金が増えて、何をやるかなと考えて、彼は、ここにテニスコートを4面作りたいたいと言って、2億円の予算を付けました。「この間の議会で通った」と言っていたから、今度、ここにテニスコートを4面作ります。

問題は、これを単に作ったで終わらせたくない。どうやって市民の活力と交流につなげていくか。それをしないと、スポーツの一部の愛好者、一部の団体だけの施設に終わってしまいますよ、ということをお願いするわけです。ですから、この辺の仕組みを作ってくださいということをお願いするわけです。

最後に、これが提案なのですけれども。スポーツツーリズムの発想が不可欠であるけれども、ここに、マネージメントの視点が、やはり必要だろう。同時に、組織横断的なネットワーク形成、これがないとダメなのではないかということです。組織横断的なネットワーク形成、これが特に大事なところなのです。スポーツツーリズムの発想、それと同時にマネージメントの視点、それに組織横断的なネットワーク形成。

今、観光にしても、あらゆるものが縦割りで行われています。観光でいえば観光協会、コンベンション協会、商店街振興は商工会議所、商工会、農業は農協、そのほかに民間企業、本来なら住民とか、子どもとか、おじいちゃん、おばあちゃんがいるのですけれども、組織に入っていないと基本的には埒外。しかし、観光で申し上げたとおり、これからの観光は、これが全部一緒にならないといけない。

スポーツによる街おこし、スポーツによる地域の活力、そこにツーリズムを通じた交流、これによって活力をさらに確実なものにしていく。そうすると、スポーツ団体だけでは無理。いろいろな関係者がこれに関わってこなければいけない。まさに横断的なネットワークが必要だ。その議論なくして、スポーツによる街おこし、地域活性化はあり得ない。同時に、参加率の向上から底辺の拡大には至らない。山が高くなると底辺が広がりにくいです。すばらしいプロ集団が必要です。けれども、ただし、プロ集団があったからといって底辺が広がるとは限りません。底辺が広がるには別のモーメントが必要です。これが、こういった形での組織的なネットワークだろうというふうに思います。

小布施、ニセコ、白馬、由布院、最近の伊豆稲取。観光で元気だなといったところは、みんなこういった横断的な組織を法人化して、持続的な組織に変えています。そういう中でスポーツによる街おこし、観光による街おこし、そういったものが行われるということです。

私は、そういった意味で、横断的なネットワークがこれからのスポーツによる地域活性化、ツーリズムを活用した地域活性化にとって不可欠ではないかなというふうに思うわけでありまして。スポーツツーリズムの発想、マネージメントの視点、組織横断的なネットワーク形成、これで「交流なくして活力なし!」「活力なくして交流なし!」といったものが具体化されるのではないかと、いうことを最初に問題提起して、終わりにしたいと思います。

司会 ありがとうございます。

会場から清水先生にご質問があれば承ります。

質問 貴重なお話、ありがとうございました。

SEASのデータのところで、文化祭ですとか、体育祭ですとか、修学旅行というデータがありましたけれども、生徒さんというのは、具体的に小学生、中学生、高校生、それぞれあるかと思いますが、そういったものの差異というのはいくらかあるのでしょうか。

清水 とりあえず、首都圏の高校52校、4万5千人だったかな、でとったのです。ですから、本来ならば、中学校、小学校でとってみると差異が出てくるかもしれませんね。とりあえずは高校というデータで分析してみました。

司会 また改めて、先生にはパネルディスカッションにパネリストとしてご出席を賜ります。

II. 展示

今回のシンポジウムでは、展示コーナーを6卓ほど設けさせていただいております。株式会社アシックス様、大塚製薬株式会社様、株式会社ジェイティービー様、長永スポーツ工業株式会社様、日本ボウリング商工会様、株式会社よしもとクリエティブ・エージェンシー様、皆様方、どうぞ、ご覧いただきたいと思っております。

Ⅲ. パネルディスカッション

司会 それでは、「スポーツの多面性と地域活性化効果」をテーマにパネルディスカッションを開催させていただきます。

コーディネーターを務めていただきます、間野義之先生をご紹介させていただきます。

なお、パネリストの方々のご紹介につきましては、コーディネーターの間野先生からお願いいたします。

間野先生は、早稲田大学スポーツ科学学術院の教授でございます。1963年、横浜市のお生まれで、東京大学大学院修士課程教育学研究科を修了、三菱総研に勤務の後、2002年、早稲田大学人間科学部助教授、2009年より教授にご就任。現在は、日本テニス事業協会理事、Vリーグ機構理事、日本バスケットボールリーグ（JBL）の理事、Jリーグアカデミーアドバイザー、横浜市の「世界子どもスポーツサミット」総合コーディネーター、川崎市の「アメリカンフットボールを活用したまちづくり推進委員会」の委員長等の要職を務めておられます。著書に「公共スポーツ施設のマネジメント」、共著に「スポーツの経済学」「総合型地域スポーツクラブの時代」「スポーツ産業論入門」等、多数ございます。

それでは、間野先生、よろしく願いいたします。

間野 皆さん、こんにちは。

最初にパネリストの皆さんに、簡単な自己紹介と10分程度のプレゼンテーションをしていただきます。3名終わった段階で自由討議をしまして、そのあと、最後にまとめてまいります。

それでは、最初のパネリスト、温泉ビューティ研究家の石井宏子さんです。どうぞ、よろしく願いいたします。

石井 皆さん、こんにちは。温泉ビューティ研究家の石井宏子と申します。聞き慣れない言葉で、「温泉ビューティ」というのは私が作った造語でして、温泉そして旅を通じて美と健康を得ようということをテーマにしています。

今日は、「スポーツと、そして温泉と」というテーマをいただきましたので、私も先ほどの清水先生同様、そんなにスポーツが毎日身近に、何か身体づくりをしているとか、あまりしておりません。ただ、温泉旅の中にスポーツという考え方をどうやって取り入れたらいいか。美と健康を得る

ために、どういう考えで旅をしていったらいいかということのヒントになればということで、その事例と、私が勉強をしております気候療法、これの考え方を取り入れるということで、今日はお話をしたいと思います。

まず、ここに「気候療法」と書いてあります。気候という字は間違っていないか、とよく聞かれるのですが、いわゆる気合いで病気を治すとか、そういう気功ではございませんで、平たく言うと、自然療法です。例えば、森林セラピーとか、遊歩道を散歩するトレッキング、あるいは海辺を散歩するタラソセラピー、あるいは温泉入浴によって身体を癒す、そんな自然の力で身体を治す、あるいは健康を手に入れる、こういうことを総称して気候療法というふうに言っています。これは、世界的にはクリマセラピー、気候療法士というのをドイツではクリマセラポイテンというのですけれども、そのことを日本語に訳すと気候療法になります。日本の温泉医学会も、実は、日本温泉気候物理医学会というのが正式な名称でございます。この自然療法すべてを一緒にの医学として学会でやっております。

気候療法というのは、本拠地はドイツになります。ガルミッシュ・パルテンキルヒェンという、ドイツとスイス、オーストリアの国境あたりの、非常に高い山があるスイスアルプスに面しているような場所です。冬季オリンピックを誘致する時に、ガルミッシュという街とパルテンキルヒェンという街が合併して、ガルミッシュ・パルテンキルヒェンという場所になりました。

気候療法は、平たく言うと遊歩道を散歩するウォーキングです。これでストックを持って歩くとノルディックウォーキングに近くなってくる。これをかなりスポーツのようになさると、ノルディックウォーキングあるいはトレッキング、そういうふうになってくるのです。

実は、ガルミッシュ・パルテンキルヒェンというところには、こういう歴史の深い街並みがあります。宗教画が描かれていたり、アルプスの少女ハイジが出てくるような雰囲気教会とか、そういったところがあります。その街からちょっと登りますと遊歩道が、なんと350通りもあります。その遊歩道を歩いておられますと、このように牛が放牧されていて、横断したり、そのすぐ横を歩いて行く、そして、ノルディックウォーキングの杖を持っている人もいれば、普通に散歩をしている人もいるというような場所なのですが。

向こうでは、気候療法というのは医学になっていますので、お医者様がお薬を処方するのと同じように、あなたの症状の場合ですと、この遊歩道を、例えば2週間の日程の中でこういうふう歩いて徐々に標高の高度を上げて心肺機能を強化していきましょうとか、あるいは身体を癒していきましょうというのを処方箋として書きます。それとおりに遊歩道を活用しながら、あるいは近くの温泉地に行って温泉入浴をしたり、プールで水中運動をしたり、そんなことをして過ごすわけです。

気候療法士というのはメトロノームです。その方に合った心拍数で歩いていけるように、ペースメーカーということで、最初に、どのくらいの速度で歩いて、どのくらいまで心拍数を上げていこうか。遊歩道の難易度、歩くお客様の状態、処方箋に合った歩き方で歩き始めます。そして、遊歩道の途中に、こんなふうにここでちょっと休憩して運動をやりましょう、という背伸び運動みたいなものであったり、ストレッチのようなやり方の看板があったりします。

そして、途中に、ヨーロッパでは温泉治療というものも、日本のように温かい温泉に入るということだけではなくて、そもそも歴史が古いのは水治療です。クナイプ博士が、クナイプ療法、水治療をやっておりまして、小川の冷たい水、こういうものをかなり活用します。

これは、私が足湯のような感じで入っているのですが、実は、川なのです。向こうの川は温泉のようにミネラルをたくさん含んでおりますので、温泉みたいな色をしているけれども、雪解け水でしびれるくらい冷たい。この冷たいものに身体を浸けることも冷刺激で、実は、冷たいのは温かい温泉に入ると同じくらい血行促進の作用があります。途中で水を組み合わせながら遊歩道を歩いていって、血管を強化したり、心肺機能を強化したり、身体の調子を整えていったり、そういうことをしていくわけです。

日本でも、実は、気候療法とは言っていないけれども、同じようなことができる地域があるわけです。例えば、十津川温泉郷、ここは奈良県なのですけれども、和歌山の熊野と隣接していて、熊野古道と一緒に通じていて世界遺産の一部になっています。その十津川温泉郷、ここに「果無(はてなし)」という場所があります。果無という場所は、十津川村は標高1,000メートルを超える山が100以上あるという山の中の街なのですけれど

も、天空都市のように、だいたい山の頂点のところにちょっとだけ集落があって、細い尾根道で急な坂のところに畑を作る、そんな暮らしをしている方がたくさんいます。その典型的な風景が、この果無というところなのですけれども、ここは非常にご長寿のお年寄りが多いのです。足元に気をつけないと、横に落ちこちてしまいそうな道です。自分では意識しなくても、階段があったり、細い道とか足元を意識する、そうやって暮らすだけで非常に脳が活性化されて、脳内ホルモンの活性化につながるということで、それがご長寿にもつながっているのではないかとこのように言われています。

このような熊野古道、これも石の道ですね。こういうところを毎日歩いていると、非常にご長寿でいられる。

そして、こんな温泉。熊野古道、熊野で熊野セラピーということをやっているメンバーがいます。ドイツの気候療法、ガルミッシュ・パルテンキルヒェンと同じようなことをしています。熊野古道を歩いている途中で、いろいろな運動や楽しい歴史、こんなものを一緒に組み合わせています。

例えば、途中の、すごく景色がいいところのガードレールを使いまして、歩いている途中でみんなストレッチをしたり、こういうものを組み合わせています。ズラッと、みんなでここに足をひっかけてストレッチをしたりします。

これは湧き水です。ドイツの水治療と同じように、日本は特に、夏、暑いですので、途中で水を手で触ったり、クールダウンをしながら歩いていく。

そして、熊野には温泉があります。これは「つぼ湯」という世界遺産の中にある古い温泉です。熊野詣をする前に身体を清める。

ここは、川湯といい、河川セラピー、ここから熱いお湯が出ていて、川の水と程良く混ざると、マイ露天風呂が作れる。夏は、みんなマイ露天風呂を作って、川遊びをしながら入っています。冬は千人風呂という大きな露天が作られたりします。

このように自然を生かしながら、楽しみながら、そして、知らないうちに運動をしているというのでしょうか。「運動しようよ」と、「さあ、運動の時間です」「さあ、スポーツの時間です」ということではなく、歴史歩き、あるいは街歩き、そういうものと自然に組み合わせることで、それが温

泉旅の中に融合する運動、スポーツになるのではないかというふうに考えています。

というのは、皆さん、例えば、温泉旅にいらして、「さあ、身体を動かすと健康にいいですよ。いっぱい歩きましょう。さあ、運動しに行きましょう」と言われても、せっかく温泉に来たからお湯に浸かってゴロゴロしていたいよ、おいしいものを食べてのんびりしたいよ、健康にはなりたいたいけれど、今日はお休みだよと思う方のほうが、実は多いのではないかと。じゃあ、その運動をいかにスムーズにさせていただいて、旅の中で、温泉、おいしい食、そしてプラス健康、美を得ていただくのかということを見ると、いかに自然に知らないうちに運動にしていくか、スポーツと呼ばないスポーツをどうしていただくのか、運動と言わない運動をどうしていただくのか、というのが裏メニューとして入れる気候療法ではないかというふうに思っているわけです。

例えば、宮城県に鳴子温泉というところがありまして、ここにも、周りにこのように散歩できるような場所がたくさんあります。熊野のように、こういう細い道があったりします。こういうところを散歩すると身体にいいですよと言われても、畳でゴロゴロしているほうがいいよと思っている人に対して、ここに行くところがある、ここに行くといいですよ、というふうに何か行く目的を、楽しみをつくるというのはどうかなと思うのです。

そんな時に、日本の温泉地で、私が一番、皆さんに、是非利用してもらおうと思うのが、温泉神社です。温泉というのは神様の恵み、地球の恵みですから、だいたい神社ですとかお薬師様があります。せっかくの温泉の恵みですから神様に感謝して、ちょっと御利益もありますので、温泉神社にお参りに行かれたらどうでしょう、お薬師さんにちょっといらしたらどうでしょう、景色もいいですよ、というふうに言います。温泉神社は、石段をずっと登った山の上にあるということがほとんどです。その土地の割と高い、見下ろせる、眺めのいい場所に作られていることが多いです。身体にいいので、階段を150段、上ってきてくださいと言われても、誰も行きたくないですけども、御利益があるので、ちょっと温泉神社へ神様に感謝しに行きましょうと言うと、まあ、半分仕方なく階段を上って、下りてくるわけです。これが程良い運動になって、そして、温泉に入る前のもとてもいい身体のウォーミングアップになって、

入浴の事故も防げるし、健康にもいいし、そして、運動と呼ばれなくても知らないうちに運動ができる、そして、神様に感謝して気持ちがいいという気候療法につながってくるわけです。

鳴子温泉には、滝ノ湯という、温泉神社の階段のすぐ横に、神様の神社から出ているお湯に入れる共同湯があります。150円で入れるのですけれども、とてもいいお湯があって、ここから鳴子温泉の旅を始める。どのお宿も滝ノ湯のチケットを出して、皆さんで推奨している、愛されているお湯です。

そして、鳴子といえば、食、農業、グリーンツーリズムなんかも推進しています。例えば、田植えをすることを組み合わせた湯治もやっていますし、今年始まりました「地大豆湯治」という、大豆の種を植える、これと温泉旅を組み合わせようというプロジェクトを始めました。皆さん、農業体験というだけですと、田植えの時期と刈り取る時期くらいしかビジネスにならないという感じになるので、農作業というのは、実は、合間がとても大事なわけです。まず、畑を借りる。途中、面倒をみていただく方がいないといけませんので、地域の農家さん、地域住民の方、皆さんと一緒にやらないと毎日のメンテナンスができないわけです。そして、そこの畑をみんなシェアをして、種を植えます。そのあと、今度は草取り湯治があります。草取りに行きます。そのあと、今度は枝豆を採ります。枝豆湯治をします。そのあと、今度は大豆を収穫します。そして、味噌造りをします。ということで、1年かけて、繰り返しその土地に来ていただくということをしているわけです。

こんなふうに、気候療法を取り入れることで、いろいろなことを体験していただく、身体で感じるということを旅にたくさん取り入れる。そして、気候療法、医学的なベース、これを取り入れていくと、実際には、運動をする時、トレッキングあるいはウォーキングをする時に、少し寒いと感じるくらいの服装が一番血管のトレーニングにいいと言われています。少し寒い服装というと、「そうだ、浴衣がある」ということで、温泉に行ったら浴衣で歩く、これが一番いい温泉地の運動ということで、浴衣歩きをお勧めしています。

間野 ありがとうございます。

普段、スポーツをやっている立場からすると、温泉で階段を上るのがスポーツなのかという、一

瞬疑問に思うのですが、石井さんのように、逆に、まったくスポーツをしていない、潜在的なスポーツ需要者からすると、階段を上るのが、それもスポーツなのだという。スポーツ健康産業という名称に、この団体も大きく変わってきているわけですので、スポーツの定義を拡大解釈して、これからニーズを発掘していく必要があるのではないかと思いました。

それでは、バリバリの競技スポーツについて、村山さんのほうから、自己紹介と事例報告をしていただきます。

村山 皆様、こんにちは。

上信越の新潟、長野、群馬、北陸の富山、石川、福井で、国内2番目のプロ野球の独立リーグ、ベースボール・チャレンジ・リーグを運営しております、ジャパン・ベースボール・マーケティングの代表、村山哲二と申します。前職は広告代理店におりまして、アルビレックス新潟のサッカーチームを、9年間、広告担当としてやってきておりました。当時、JFLだったアルビレオ新潟という、年間の運営コストが3千万円くらいの時のアルビレオ新潟から、今、年商で28億円、J1でも、今、3位を走るアルビレックス新潟に育て上げた池田弘さんや中野幸夫さんの一番近くにいる、僕自身がアルビレックス新潟の社員よりもアルビレックス新潟のことを愛しているということを言ってもらったくらい、アルビに対して傾倒し、一所懸命に彼らのマーケティングに対してのお手伝いをしました。

その時に、地域において、プロスポーツが地域を劇的に活性化させる力を持っているということ、現場で体験をしました。実際に、スポーツを見て、スポーツを感じて、Jリーグで名もない選手をビッグスワンで見ながら、何で新潟のサポーターたちはボロボロボロボロ涙を流しながら応援するのだろうか、そこに至るまでの苦労や努力というものを、アルビレックス新潟がしてきたものを、僕は、今度、野球でそれをやろうということ、池田弘さんから相談されて、心に決めて、退社して、みんなで一緒にやっております。

四国アイランドリーグの石毛さんから、大学の先輩でもあるものですから、話をたくさん聞きました。四国アイランドリーグと僕らは、同じ独立リーグですけれども、ひとつだけ決定的に違うものがあります。それは目的です。石毛さんは、NPBを志す男たちの夢を叶える場、または、夢

をあきらめさせる場としての独立リーグを、練習環境がキャンプで一番整っている四国に作るということを宣言して、四国アイランドリーグを立ち上げました。石毛さんのリーグが成功するか否かの一番のハードルは、プロに選手を何人送り込めるかどうかというところが一番の判断材料であるのに対して、僕たちのベースボール・チャレンジ・リーグは、NPBに選手を送り込むことを目的としていないプロ野球のリーグです。目的は、野球事業を通じて地域の活性化を図ること、野球事業を通じて地域に貢献すること。その結果としてNPBに行く選手が何人か出る。選手たちには、このことを強く意識させた上で、日々プレーをしてもらっているというところがございます。その取り組みを少しご紹介させていただきます。

BCリーグの概要です。6県球団でやっております。上信越と北陸の2県で行っており、プレーオフ制度でチャンピオンシップを行い、全リーグの開催試合が、4月～9月までで216ゲームの公式戦を行っております。先週の日曜日に、独立リーグの来場者数の新記録を作りました。新潟県立球場、HARD OFF ECOスタジアム新潟という新潟で3万人入る新しい県立球場が今月オープンしたけれども、こけら落としは阪神と広島戦にとられてしまったが、その週の日曜日、僕たちが初めてスタジアムで開催させていただきました。信濃グランセローズ対新潟アルビレックス・ベースボールクラブの試合で、1万5,311人の来場者を集めて、独立リーグの来場記録の新記録を達成したというところで、こんなにちっぽけな、読売巨人軍の150分の1の運営コストでやっているプロ野球球団だけれど、頑張れば1万5千人くらいの来場者だって集められるぞという気合いの入ったプロモーションをたくさん行いました。

来場者数、全体では少し微減している状況ですけれども、招待者とか、小中学生の招待者を極力減らしながら、安くてもいいから有償のお客様の数を少しでも増やしていこうというところが僕たちの今回の狙いで、新潟、富山あたりは、少しずつですけども、来場者数が増えているところでは。

去年の決算で、6球団の中で石川ミリオンスターズが単年度黒字を達成することができた。プロスポーツで、僕らの独立リーグで初めて単年度黒字を出すモデルを作ることができて、それに続いて信濃グランセローズも黒字化の目途を作れたということで、少しずつではありますが、ビジネ

スが軌道に乗っているというところを見て取ることができるのではないかと考えております。

ここからが本題になるけれども、今、具体的にいろいろと取り組みをさせていただいている中で、僕たちが、地域・スポーツ振興賞の最優秀賞をいただくことになったととてもありがたい事業です。これはシリコンバンドです。このシリコンバンドは500円なのですが、球場で売って、AEDの購入資金に充てようという活動をBCリーグが始まった年からずっとこれは続けております。僕たちの地域貢献の形として、これを僕らで一所懸命に推進しているけれども、この活動の根っことなっているのがBCリーグ地域貢献プロジェクトというところでございます。

何でこういうことが起こったのか。今、清水先生からすごく楽しい話をたくさんいただきました。どうやったら地域間交流ができるのだろうか、どうやったら地域と活力、交流というものができるのだろうかというところで、いろいろなアイデアがありました。内面的な部分で、僕たちは、アルビレックス新潟というサッカーチームから教わった部分を、このBCリーグという野球のリーグに植え込まなければいけないということを強く感じました。僕たちがプロ野球をするにあたって一番排除しなければいけないもの、それは、NPBの日本プロ野球の悪しき習慣でした。

地域におけるスポーツの最大のコンテンツというのは、高校野球です。高校野球の準決勝、決勝の開催日に、BCリーグが一回、隣の街でゲームをしたことがあるけれども、高校野球の決勝戦は、7千人入ったけれど、BCリーグの信濃グランセローズのゲームには700人くらいしか入らなかったということもあって、地域のコンテンツとしては圧倒的に、もちろん歴史も含めて、高校野球には僕らは絶対になかないというふうに思っている。何でかなわないのかなとずっと思っているけれども、やはり、高校野球が持っている本来のスポーツが持つすばらしさだとか、ひたむきな姿だとか、そういったところに対して、地元の人たちが、勝っても負けてもエラーしてもヒットを打っても、「頑張れ、頑張れ」と応援してくれる気持ちがあるから、あそこまで盛り上がるのだということを僕たちは再認識するべきだなと思いました。

僕たちのBCリーグでは、試合の開始前と試合が終わった後、お互いの選手とお互いのファンに対して、「ありがとう」「よろしくお願ひします」

と必ず挨拶をすることになっています。普通だったら、お金を払って見に来ていただいたお客様に対して、「ありがとうございます」と選手が挨拶することは当たり前だと思うけれど、でも、BCリーグというのは、監督、コーチが3人いますが、全てNPB経験者なのです。かなりベテランの方も含めてやっていたけれども、「何で、試合に負けて、はらわたが煮えくりかえっているのに、相手に対して挨拶せないかんのや」ということを、僕は2年間かけて何度も言われました。でも、おかしいよなど。あなたも高校生までは、社会人までは、大学までは、しっかりと挨拶をしていたでしょう。観客に対してお礼を言っていたでしょう。リスペクトができていましたよね。というところで、しっかりとお互いに挨拶ができて、観客に、勝っても負けても「ありがとう」という言葉を言えるように、やっと、今、言えるようになるくらいまでいきました。

去年、ものすごく辛い事件があって、群馬のゲームだったけれども、選手同士でデッドボール合戦が始まってしまったのです。デッドボール合戦というのは、ピッチャーがインコースをえぐって、ドンドンとバッターに2回、3回と1試合中にぶつくと、次の回に、別のピッチャーが今度はインコースにぶつけるという、プロ野球では非常に悪しき習慣ですけれども、それをやってしまった。それを見て、ぶつけられたバッターの次のバッターが初球、ホームランを打って、ダイヤモンドを一周する時に、デッドボールをぶつけたピッチャーに対して、首を切るジェスチャーをして、「死ね、死ね」と言いながらダイヤモンドを一周した。その時に、僕たちは地域貢献のための野球をするということをみんなに宣言して決めて、行政からも自治体からもお金をもらって、助成金をもらってやっているにもかかわらず。終わったあと、僕たちは必ず野球教室をやることにしている。200人、300人という野球少年を招待して、「とにかく、おじさんたち、一所懸命に野球やるから後で一緒に野球やろうよ」といってやるのですけれど、その子どもたちが、前橋市民だったけれども、怖がってボロボロ泣き出してしまったのです。こうやって「死ね」というシーンに対して。

そのことがきっかけになって、もう一回、本当にこのことを見直さなければいけないなというふうに思いました。俺たちは本当に何のために野球をやっているのだろう。何のためにこんなに苦労して、電通まで辞めて、給料が半分になって、

何でみんなで苦労して野球しなきゃいけないんだということを、みんなで一回再確認をしました。全ての代表者と全ての監督、コーチ、フロントスタッフ全員で決めたことは、BCリーグ憲章を作ろう、ということ。俺たちは何のために野球をやるのか、俺たちは、地域と、地域の子どもたちのために野球をやるのだ。

BCリーグは、地域の子どもたちを、地域とともに育てることが使命である。

BCリーグは、常に全力のプレーを行うことにより、地域と、地域の子どもたちに夢を与える。

BCリーグは、常にフェアプレーを行うことにより、地域と、地域の子どもたちに夢を与える。

BCリーグは、野球場の内外を問わず、地域と、地域の子どもたちの規範となる。

このことを僕たちで決めました。

地域貢献プロジェクトというのを立ち上げました。このプロジェクトに対して、地元のマスコミの人たちが、毎月1回、15段の新聞記事、編集記事を書いてくれることになりました。地域と一緒に、これは富山サンダーバーズの美化活動。田植えもするぞ、マナー教室もやろうよ、挨拶運動をしよう、学校での下校の見守り隊をやろう、毎週月曜日と火曜日、ある時間を決めて、全ての選手たちに強制的に地域貢献活動というのをやらせることを決めました。僕たちの目的は、選手をNPBに送ることではなくて、彼らがNPBをあきらめた時に、その地域で社会人として地域の役に立って、地域のオーナーだったり、地域の従業員のみんなから、「BCリーグの選手は、とてもマナーがよくて、とてもよかったよ。ありがとうね」と言われることが本当のゴールだということを、僕たちが地域活性化と地域貢献というものを真剣に志すための活動の根っこにしています。

僕たちのリーグに、一回来てみてください。長髪、茶髪、髭を生やしている選手、一人もいません。選手契約書で、その選手は即刻解雇するということを全員で決めております。いろいろな批判もあり、個性がなくなるということも言われたのですが、ダルビッシュの真似をするのなら、ダルビッシュになってからやれと。基本ができていないやつは、基本が徹底的にできるまでは、やはり、忠実に、まじめに、真剣に、真っ直ぐに野球に取り組むこと。地域に対して本当に君たちは必要だと思われる活動を、どれだけ僕らが真剣にできるか。そのことに絞って僕たちは活動をしています。

間野 ありがとうございます。

今回、スポーツの多面性とか多様性ということで、そこからどうやって地域経済とか地域活性化ができるか。石井さんのホンワカした癒し系のソフトなスポーツから、村山さんの茶髪禁止、競技スポーツまで、これだけ実はスポーツは幅が広いわけです。

そこで、清水さんは、そういう方々をまとめて、それぞれに縦割りではなくて、それで地域活性化をしなければいけない。いきなり難しい質問ですけども、このようなお二人をまとめて、どんな地域活性化とスポーツビジネスができそうでしょうか。

清水 僕は、すぐできると思います。石井さんとは、もう、実は、鳴子とか、あちこちで組んでいるので、今日、村山さんとお会いして、すぐ組むことにいたしました。勝手に決めました。あるフィールドを決めてやります。

問題は、なかなか既存の組織、しがらみが大変なものです、地域というのは。しかし、それを乗り越えるしかない。その乗り越える力を持っている人たちを結集するしかないということなので。もちろん乗り越える力があります。それをうまい形で結集をしていこう。このうまい形にするかどうかというのはコーディネーターの力だと思います。是非、それをやりながら、スポーツ、あるいはツーリズム、あるいは温泉を含めた、多面的な担い手を抱えた協議会を作って、街おこしをやっていくということをやりたいなど。

間野 ありがとうございます。

石井さんのソフトな、やわらかい、癒しの広い意味でのスポーツから見て、村山さんとのコラボレーションとして、例えば、どんなアイデアが考えられますか。

石井 私、全国の温泉地を旅して、年間200日くらい、どこかにいるという感じなので、いろいろな温泉地に行って思うことは、「えっ、こんなところに、こんな立派なスポーツ施設があるの」というのが結構いろいろなところにあるのです。地域住民の集会ができるような場所が、ちょっと変えると非常にいい室内のスポーツ施設として使えとか、競技もできるくらいの規模の温水プールがあったりとか、そういうところが一部の地域住民の方がちょっとした水中運動をしているだ

けとか、あまりうまく使われていないのです。ホンワカした温泉地の中に、バリバリのプロのすばらしいスポーツの方たちが、そういうところを何か活用して、いい試合をしていただいたりとか、もう少ししていただくと、「こんな温泉地もあったの」というところに、サポーターの方たちが来てくれたりするのではないかなと、何かそういうつながりができたらいいなと思うのですけれども。

間野 湯治というか、温泉に来たような人たちにとっても、バリバリの競技スポーツは刺激的でしょうか、石井さん。

石井 温泉地に旅をしにくる方というのは、そこでたまたま出会ったお祭りごととか、大好きなのです。ちょっと旅をする時に、「なんだ、明日、こんなすごい試合があるの」とか、「こんな人たちが合宿に来ているの」とか、そういうようなことがあるとすごく喜ぶ方がたくさんいると思いますし、地域の元気にもなると思います。

間野 同じ質問ですけれども、村山さん、石井さんとのようなコラボレーションをすると、ますますリーグが盛り上がるでしょうか。

村山 長野県、観光振興課から、今回、お金が出て、実際に実施することになった事例をちょっとご紹介するのですけれども、僕らのリーグというのは基本的にバス移動です。要は、40人が詰まって、みんなでバスで往復400キロくらいを日帰りするものですから、地域間交流というところで、本当に僕らは担い手になれるというふうに確信しているのです。その中で、信濃グランセローズが富山サンダーバーズとアウェイで対戦する時に、富山アルペンスタジアムに信濃グランセローズが行く時に、長野県観光大使とともに長野県の観光課の人たちがこぞって、みんなで付いていくことにしたのです。長野の野沢温泉の宿泊券だとか、志賀の宿泊券だとか、おやきだとか、野沢菜だとか、そういったものを販売ブースで、出店して、富山の人たちに信濃の選手たちがおみやげを持ってきたんだよということで、富山のファンの人たちに、長野の物産や観光や温泉や、そういったものを味わってもらおうという提案を信濃グランセローズがしたら、「これは是非、やろう」ということで、すごくいい形でできることになった。

そんなところの交流を、地域と地域、しかも隣県同士で、あまり仲良くないかもしれないけれど、お互いに行き来して、サポーターも行き来するのだけれど、実は、観光と物産、もちろん、温泉も含めて交流していったら、もっともっといろいろなものが広がるのではないかなというふうには思いました。

間野 清水さん、今のグランセローズのケースと、モンテディオ山形の似ている部分と違う部分がある、もしあれば、教えていただけますでしょうか。

清水 極めて似ていると思います。まさに、村山さんは、私どもがやろうとしていることと同じことをやられているなというふうに思いました。

それぞれの団体が自分の領域を持っておられるけれども、業界団体だったら業界、観光団体だったら観光、それを超えられなければいけない。それを超えられるかどうか。まさに、村山さんはそれを超えられます。まったく関係のない人、スポーツに縁もゆかりもない人、無関心な感じのする人、その人とどうやってコラボするか。観光で言えば、まったく無関心なおじいちゃん、おばあちゃん、農家のおばちゃん、小学生の子ども、そこどうやってコラボレーションするか、それが全てなのです。そこが、村山さんは、私は、徐々にできあがるのではないかと。

あちこちにテニス協会とか何とか協会というのがありますが、是非、そういった協会の方々がちよっと違う領域の方とお付き合いをする、観光協会とか、あるいは農協とか、そういうお付き合いをすることによって新たなものが見えてくる。

どこでも運動施設はあります。せっかくあるものをどうやって活用するか。そうすると、その枠から越えなければいけないのです。というふうに思います。

たぶん、スポーツ庁というのは、そういった枠から越える横断的なところで出てくるのではないかなと私は思いますけれども。

間野 その枠から越える、横断的にするためには、マネジメント、あるいはコーディネーター、そういう各団体の利害にとらわれない人が必要なわけですね。

村山さんのケースでは、それを担当する人というのは、どなたなのでしょう。つまり、全体を

統括して、それぞれの団体の利害関係だとか思惑を調整しながら多面的なスポーツプログラムを作っていく。それは、どなたが実際に担っているのでしょうか。

村山 今は、僕らの球団のそれぞれの代表者で、僕は、今、44歳、グランセローズの副社長が42歳で、そういう活動に対してものすごく情熱を持っています。今回、法人を作る時に、「野球の興行をやる」ということでやったら誰も付いてこなかったと、皆さん、おっしゃっていた。たまたま野球というコンテンツだけけれど、「地域への貢献とか地域に恩返しをするために、俺たちは野球を使ってやろうぜ」ということでお金を集めたのですけれど、そうしたら集まってきたというところで、それぞれの視点が活性化にあるものですから、みんなで出した知恵ですし、もちろん、早稲田の原田先生から時々アドバイスをいただいて、これから、清水先生というものすごく強力な援軍を、ものすごく大きな期待を、今、感じているので、アドバイスをいただきながら今後やっていきたいと思っています。

間野 石井さんが行かれたドイツでは、全体をオーガナイズしたり、コーディネート、マネジメントするような、人材とか、指導者とか、そういう人はいたのでしょうか。気候療法も含めて、滞在とか、全体を含めて。

石井 ドイツで地域のところまでは、分からないけれども、ドイツの場合は、ミュンヘン大学に気候療法を体系化して考えた先生がいらっしゃるって、そこで気候療法士という仕組みを作って、いわゆる地域住民の人たちが研修を受けて、そのガイド役になるということをしている。それをやっている方が、いろいろな産業に携わっている方がいる。街に住んでいる人もいれば、観光産業をやっている人もいれば、商店主だったり、教会の牧師さんだったり、いろいろな方が、そこにきたお客様をナビゲートする気候療法士の仕事もしているというところが、そこで既にコラボができていたというようなことではないかと思う。

やはり、枠を超えた方たちの交流によっていろいろなものが活性化している温泉地というのは確かに元気です。お宿の人とか、商店の人とか、そこにただ住んでいる人とか、農業をやっている人とか、そういう人たちが全部一緒になって何か

をやっているという時に、ものすごくパワーが出てくるというように思います。

間野 ありがとうございます。

フロアの皆さんで、何かご質問とか、ご意見とかございますでしょうか。自分はこの事例を知っているということでも結構です。

田中 NPO法人のマナーキッズプロジェクトの田中と申します。

今、枠を超えたコラボレーション、異分野の連携ですね。同感と思います。私、スポーツと音楽を通じて、小笠原流礼法とのコラボレーションで、幼稚園、子どもに礼儀作法、マナーを教えております。テニスだけで約2万7千人、サッカーとか、ほかのスポーツで約1万人です。是非、皆様方とこれから組ませていただいて、地域活性化と同時に、子どもの健全育成にスポーツ等が発揮できればと思っております。

間野 礼儀作法、マナー、村山さんのところと何かつながりそうな気がします。

最後に一言ずついただいて終わりたいと思います。

村山さん、石井さん、清水さんの順で、お願いいたします。

村山 今、僕らは6球団でやらせていただいております、僕たちの使命も含めてお話しさせていただいた。最終的に、お金がなければビジネスとして成り立たないというプロスポーツが抱える本当の最大の課題で、収支に見合う収入というものをどうやって稼ぎ出すかというところがすごくあると思います。汗をかく人間とお金を出してくれる人間と、それができなければ知恵を出す人間、それぞれの人たちがどれだけこういったビジネスに関わってくれて、それぞれのフィールドで僕たちを助けてくれるか、一緒に考えてくれるかというところを、多くの人たちから僕たちの事業を助けていただきたいと思います。

石井 ちょっと癒し系の、スポーツと呼べるかどうかというふうなお話があった。今日は、スポーツのプロの最前線のところにいらっしゃるビジネスの方が多いと思うのですが、裾野のところのスポーツというバリバリのところに無縁のものと、スポーツのプロのノウハウをコラボするとい

うことを、是非、広げて考えていただきたいと思うのです。つまり、例えば、田植えをしたり、大豆を植えたりした後のストレッチはこういうふうにするとういとか、そうすると腰痛が防げるとかというのは、プロのスポーツ、身体の運動学的なことが分かっている方に、是非、そういうことをアドバイスいただきたくったりする。普通の、バリバリのスポーツ最前線にいないで、温泉地に来る、旅をする人の場合は、田植えをするだけでもスポーツです。身体を、ちょっと階段を上るだけでも運動なので、そういうときの後にどうしたらいいとか、もう少し運動の考え方を広げていただいて、何とかプロのスポーツのノウハウを一般の方の旅の健康に広げていく、それをつなげていくということができないかなと思っています。

清水 このスポーツ健康産業団体連合会が、大きな核になってほしいなというふうに思います。ひとつは、やはり、業界自体がしっかりしなければ何もできないということがあります。そういった意味で、横の意思疎通をとりながら、しっかり経営基盤の確立を含めて、業界自体が成り立つように、是非、みんなで頑張っていこう。これがひとつです。

2つ目が、次の展開、これが地域という、あるいは連携というキーワードだと思いますけれども、その次の展開をしないとステップアップはあり得ないのだということをご理解いただきながら、特に地域においては、連携、あるいは地域における横断的なネットワークとか、そんなものを下部組織でも結構ですから、作られるようお願いをしたいなと思います。

地域において地域づくりのお手伝いをしていますけれども、観光協会が自らを変えていこうという動きが出てきました。そこに、農協、商工会議所、あるいは環境団体がかなり入り込んで、一緒になってやろうという動きが出てきていますけれども、残念ながら、まだスポーツ団体が入っている事例というのはほとんどありません。スポーツ健康産業団体の方々、もう一步、ちょっと前に出られるということをお願いしたいなというふうに思います。

間野 どうもありがとうございました。

スポーツ健康産業の市場規模には諸説ありますけれども、公営競技を含めて9兆円という数字があります。その数字と比較して、ヘルスツーリ

ズムだけで4.1兆円ある。通常、私たちがこれまでスポーツ人口というように考えていた人、つまり、競技スポーツという人たちからすると、考えていなかったような新たな市場が4兆円くらいあるのです。その人たちに、どうやってスポーツ、あるいはスポーツという名前を付けなくても、身体を動かしてもらおうか。こういうスポーツ健康産業というところに、どう消費者として、顧客として関わってもらおうのか。たぶん、その視点を考えるためには、本当に多面とか、多様とか、今までの既成概念を変えて、相当広くスポーツ市場を見ていく必要があります。

スポーツをしている人というのは、週1回、35%とか40%とかありますけれども、その多くの人が、実はウォーキングと体操なのです。テニス、ゴルフ、スキー、水泳、バスケット、バレエ、野球、こういう競技種目になると、それは10%を下回ってしまう。このような現実がある中で、石井さんのような、ちょっと身体を動かしたり、グリーンツーリズムに行った後にストレッチしたい、という人たちにもスポーツ健康産業に関しては、実はニーズがあることがわかりました。もっと専門的なサービスだとか、高度なサービスだとか、本物を求めてきているということが、今日のお話の中でよく分かったのではないかと思います。

今後、スポーツ健康産業を拡大していくためには、お互いがもう少し胸襟を開いて情報交換をして、一緒に組織化していく。これがスポーツ健康産業の次の発展の糸口になるのではないのかということが、今日のお三方のお話で分かったのではないかと思います。

司会 大変ありがとうございました。

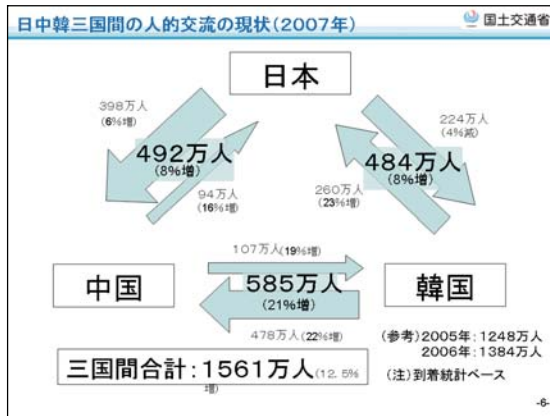
幅の広いスポーツの分野と地域活性化をコーディネートするという非常に難しいテーマを、大変分かりやすくお話ししていただきました。

(終了)

スポーツの多様性と 地域活性化の効果について

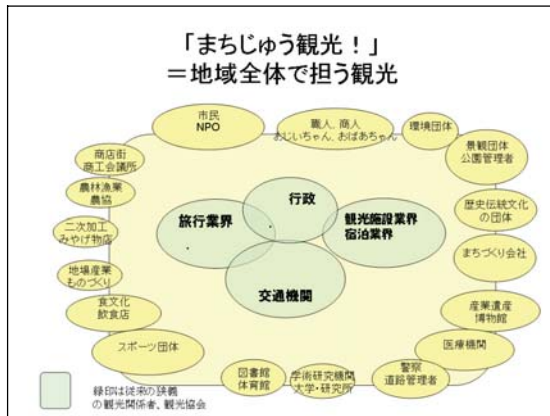
立教大学観光学部特任教授
(株)ジェイティービー常務取締役
(株)ツーリズムマーケティング研究所顧問
清水 慎一

- ・「交流なくして活力なし！」
人口減少で衰退する地域が観光などによる交流で元気に！
《観光立国、観光立県の認識》
- ・「活力なくして交流なし！」
地域独自の魅力や資源を活かした「まちづくり」や「住民の活動」が観光による交流を活発に！
《アイデンティティ(地域の歴史、伝統、文化に対する誇り)の確立》
⇒交流＝「地域内の交流」＋「地域間の交流」
《住民の地域活動》《観光交流》



「旧来型観光」と「多様な観光」

	旧来型観光	多様な観光
旅の形	物見遊山の周遊型 「観光施設の観光」 非日常型 一時期に集中	生活体験の滞在型、 「たび＝地域観光」 異日常型 オンとオフの境なし
旅の目的	名所・旧跡 金銭消費	テーマ性の強い旅 時間消費
地域との関係	観光地が地域と乖離 囲い込み	地域の生活の共有、 体験、交流、学習
旅の経済性	一点豪華型	リーズナブルなDIY 型、

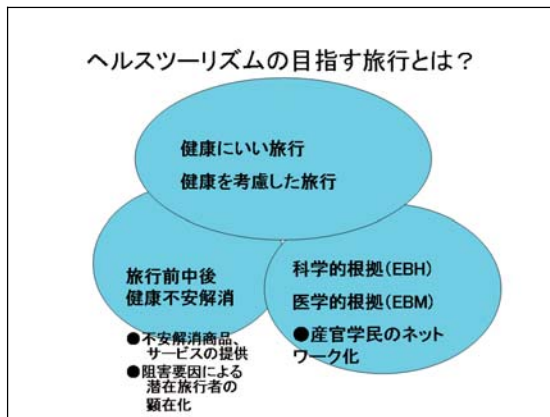


まちじゅうの地域資源を繋ぐ！

ニューツーリズム
《例》グリーンツーリズム＝農業＋農家レストラン＋おじいちゃんの話＋農村景観＋健康＋旅館・ホテル・・・

- ・エコツーリズム、ヘルスツーリズム
- ・産業観光、歴史観光《街道を歩く・・・》
- ・まち歩き、村歩き
- ・川遊び(リパーツーリズム)

⇒旧来型観光(観光施設＋旅館)はオールドツーリズム(マスツーリズム)



スポーツ・ツーリズム

- ・「多様な観光」を支えるスポーツの多様性
- ・スポーツの多様性＋ツーリズムの多様性
 - ＝地域の交流を活発化(地域活性化)
 - ＝地域の広がり(一体感)
 - 地域内の交流
 - 地域間の交流(観光)

スポーツ・ツーリズムの意義

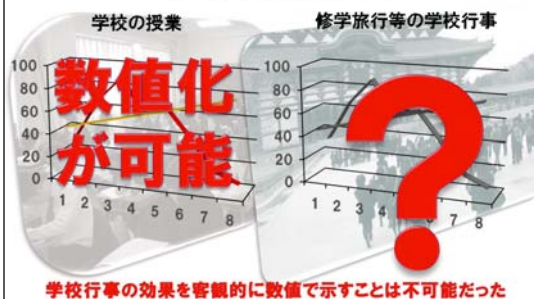
- ・スポーツやスポーツ団体を核とした地域活性化への取り組み
 - 地域内の交流
 - 「観戦から参戦へ！」
 - 地域間の交流
 - 「観戦から観光へ！」

～学校行事の実施効果を検証～

「学校行事効果測定システムSEAS」 開発と実施

JTB法人東京・東京学芸大学
学校行事における効果測定共同研究プロジェクト

開発の経緯と経過



35

学校行事評価システム(SEAS)の構成内容



学校行事、企業行事と地域

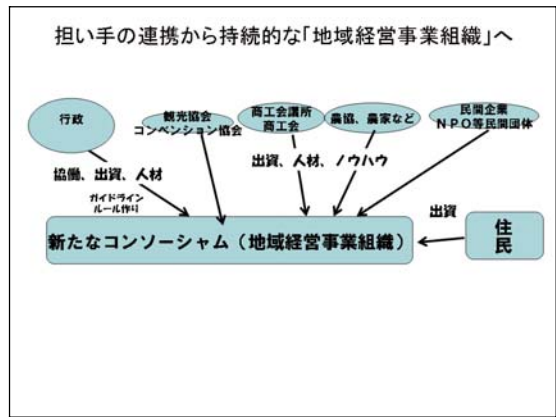
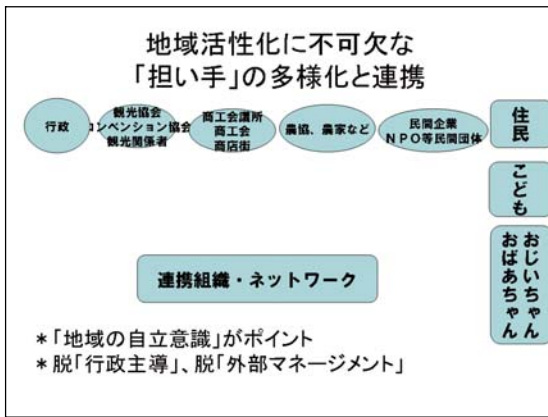
- ・学校行事、企業行事の再評価
- ・効果を最大にするには「地域との交流」《スポーツツーリズムの発想》の視点が不可欠！
- ・学校主体、企業主体ではなく「地域とのかかわり」を大事に！

スポーツによる地域活性化 《福島大学黒須充教授》

- ・「総合型地域スポーツクラブ」構想
 - ＝生涯スポーツ社会の実現
 - ＝豊かな地域コミュニティの再生
- ・地域住民運営型のスポーツクラブの意義
 - ＝スポーツ参加率の向上
 - ＝世代間の交流、高齢者の生きがいづくり
 - ＝医療費の削減
 - ＝専門的な指導、一貫指導
 - ＝情報の発信拠点
 - ＝地域教育力の向上

スポーツの多様性と地域活性化

- ・「交流なくして活力なし！」
- ・「活力なくして交流なし！」
 - ＝スポーツツーリズムの発想が不可欠
 - ＝地域にある資源をいかに有効に活用するかというマネージメントの視点が不可欠
 - ＝組織横断的なネットワーク形成が不可欠



石井宏子 氏

温泉旅とスポーツ (旅の中の気候療法)

温泉ビューティ研究家
気候療法士 (ドイツにて修了)
石井宏子

旅に気候療法を取り入れる

気候療法とは

熊野古道 健康ウォーク

熊野古道

旅に気候療法を取り入れれば・・・

「体感」する

- 温泉は五感で入る
「見る」「触れる」「香り」「味わう」「聞く」
- 気候療法的「温泉街の歩き方」
浴衣で歩くと体にいい？

BC(ベースボール・チャレンジ)リーグについて



株式会社 ジャパン・ベースボール・マーケティング
Japan Baseball Marketing Inc.

BCL BCリーグ:プロ野球独立リーグ
ベースボール・チャレンジ・リーグ

BCリーグの概要

目的
①各球団によるプロ野球球団の関連や野球普及活動を通じた地域の活性化
②各球団の育成施設、野球事業を通じた選手育成への貢献

加盟球団
各球団それぞれ球団運営法人を設立し、リーグ戦を行います。
2007年シーズンより、群馬県、埼玉県を主体とし、群馬県、長野県、富山県、石川県と合わせて6県で運営。

選手
平成18年4月1日より新規登録選手(登録数)3,469人。現行山梨球団(登録数)2,322人、東京山梨球団(登録数)2,403人、4月1日現在登録選手(登録数)4,332人。石川県球団(登録数)1,371人。選手は各球団の育成施設から育成され、リーグ戦で活躍する。リーグ戦の開幕戦は、群馬県を主体とし、埼玉県を主体とする。リーグ戦の開幕戦は、群馬県を主体とし、埼玉県を主体とする。



BCL BCリーグ:プロ野球独立リーグ
ベースボール・チャレンジ・リーグ

地域貢献プロジェクトの発表

■いずれの開幕ゲームにおいても、BCリーグが本年度から推進する「地域貢献プロジェクト」の発表を試合前にし、選手・あるいは球団代表が「BCリーグ憲章」を朗読し、地域貢献への決意を表明いたしました。

BCリーグ 地域貢献プロジェクト
「地域と、地域の子供たちのために」
BCリーグは、地域の選手たちを、地域とともに育てることが使命である。
BCリーグは、常に全力でプレーを行うことにより、地域と、地域の子供たちに夢を与える。
BCリーグは、常にフェアプレーを行うことにより、地域と、地域の子供たちに夢を与える。
BCリーグは、野球場の内外を問わず、地域と、地域の子供たちの規範となる。

BCリーグ憲章
「地域と、地域の子供たちのために」
BCリーグは、地域の選手たちを、地域とともに育てることが使命である。
BCリーグは、常に全力でプレーを行うことにより、地域と、地域の子供たちに夢を与える。
BCリーグは、常にフェアプレーを行うことにより、地域と、地域の子供たちに夢を与える。
BCリーグは、野球場の内外を問わず、地域と、地域の子供たちの規範となる。

事業は球場の内外で徹底され、以下を実施しています。
・選手の常態・ピアスの禁止
・ユニフォームのスタイルの統一
・球団ごとの地域貢献プロジェクト担当マネージャーの設置
・活動の定期報告

BCL BCリーグ:プロ野球独立リーグ
ベースボール・チャレンジ・リーグ

MIKITO AED PROJECTの推進

2007年に続き、6球団で実施。球場でリストバンドを販売、追悼試合ではAEDの実演もMIKITO AED PROJECTは、BCリーグのもっとも格となるアイディティであり、出発点です。

2007年は4球団がリストバンドを作成・販売し、4県地区で8台のAEDを施設に寄付いたしました。

2008年度はリストバンドを新たに制作し、各メディアに発表いたしました。記者会見にはかつて水島根人くんの在籍していた大和川まりんファイトーズの選手、根人くんのお母さんもご出席いただきました。BCリーグの地域貢献活動をアピールしました。

また、新潟球団では平成20年7月12日美山球場での「新潟×富山」戦を「根人くん追悼試合」とし、選手によるAEDのデモンストレーションを試合前に実施、AED普及活動を推進しています。



BCL BCリーグ:プロ野球独立リーグ
ベースボール・チャレンジ・リーグ

[観客動員]新潟は大幅アップも全体は微減

■前半戦の総入場者数は130,277人。1試合平均は1,206人でした。

2008年度前半戦 観客動員実績(試合別) (試合別)	2008年度後半戦 観客動員実績(試合別) (試合別)			
群馬	18,777	1,846	200,944	0.97%
埼玉	20,088	1,976	243,796	0.96%
千葉	22,824	1,268	214,601	0.95%
合計	61,689	5,090	669,341	
富山	24,796	1,176	111,160	0.13%
石川	16,332	807	117,994	0.07%
石川	18,443	1,102	67,525	0.13%
合計	59,571	3,085	296,679	
リーグ全体	121,260	8,175	966,020	

参考:2008年度前半戦観客動員実績(12球団) (試合別)

球団	試合数	1試合平均	観客人口	増減率
群馬	32	586	18,777	0.97%
埼玉	32	618	20,088	0.96%
千葉	32	685	22,824	0.95%
合計	96	630	61,689	
富山	16	155	24,796	0.13%
石川	16	88	16,332	0.07%
石川	16	106	18,443	0.13%
合計	48	116	59,571	
リーグ全体	144	646	121,260	

●観客動員増減(12球団) (試合別)増減率

●全体で前半戦は試合当たり12人の減りがあります。
チーム別では、新潟、富山が対戦を維持。一方で昨年度も観客力の高かった群馬が17%の減り、千葉が2%と減っています。
群馬は2008年度前半戦に観客動員を伸ばしたため、もっとも観客増がりました。
●前期優勝を挙げた石川は観客増がりました。

●全体の課題
●時期による観客動員(平日ナイトの観客動員)が地方球場での観客動員が課題となっています。
●シーズン全開に向けての事前告知
●後援企業への事前告知の徹底
●自球場を巡るの告知
などを実施、改善していく必要があります。

BCL BCリーグ:プロ野球独立リーグ
ベースボール・チャレンジ・リーグ

[活動]始動した地域貢献プロジェクト

■MIKITO AED PROJECTの理念に基づき、2009年からリーグ全体での取り組みを行っている「地域貢献プロジェクト」。

各チームごとに活動内容を毎月提出し、新聞紙上・およびホームページで報告しています。



●各チームの活動内容を4月24日(2009年)の各紙、富山から福井新聞・北陸新聞・日本新聞

BCL BCリーグ:プロ野球独立リーグ
ベースボール・チャレンジ・リーグ